【学会報告】

経営行動研究学会第20回大会及び日本・モンゴル国際シンポジウム第10回大会

（早稲田大学：2010年8月3～5日）

董　　光哲

早稲田大学で，8月3～5日に経営行動研究学会の第20回大会が開かれた。第20回全国大会の開催期間中の8月3･4日の両日には第10回日本･モンゴル国際シンポジウムも開催された。第20回全国大会の統一テーマは「新しい経営行動の方向と課題」で，第10回日本・モンゴル国際シンポジウムの統一テーマは「環境・政策・経営行動」で，三日間に亘り多様な発表が行われ盛況であった。

2008年のアメリカのリーマン破綻を端に世界中に広がった金融危機から，「アメリカ型の資本主義システム」の再評価と新しい経済・社会システムの構築が活発に議論された。このような問題意識の基で本大会は自由論題，統一論題，特別記念講演の３つの部分に分かれ，自由論題では18名の方々が自分の研究成果を報告した。筆者も自由論題で発表の機会をいただき，貴重なコメントをいただいた。統一論題では統一テーマである「新しい経営行動の方向と課題」をめぐって，「会計基準と企業の会計行動―環境関連負債に関連して―」，「日本コーポレート・ガバナンスの新たな方向と課題」，「パラダイムシフトと支配力学の変容―破壊的技術変化に関する考察―」，「日本の人材管理―課題と方向」，「新たな経営行動―M・P・フォレットを通して―」の５つの報告が行われ，盛況であった。

また，特別記念講演では日本の著名な経営学者である三戸公先生の「危機的段階と新しい経営行動」の講演が行われ，今後，どのような経営行動を取るべきかに大きな啓発を与えた。

特に，経営行動研究学会は2000年から毎年，モンゴルと日本両国で，国際シンポジウムを開催していた。2010年は日本で開催する年で，モンゴル側としてモンゴル国憲法委員会委員・モンゴル国初代大統領のPunselmaa Ochirbat氏，モンゴル経済ビジネス連合会長・モンゴル科学アカデミー副会長・モンゴル国立大学教授のTuvd Dorj氏をはじめ31名の方が来日し，日本側では77名の方が参加した。第10回日本・モンゴル国際シンポジウムの統一テーマは「環境・政策・経営行動」で，モンゴル側６名と日本側５名の発表が行われた。モンゴルは経済発展と伴い，地下資源・鉱山開発が急ピッチで進められている。しかし，それに伴って環境問題も深刻化している。例えば，ウランバートルでは，スモッグに見舞われ，呼吸器系の病気の罹患者が急速に増加している報告がある。日本でも高度経済成長期に環境問題が深刻化し，大勢の人々が苦しみを体験した。いまや環境問題は世界問題である。本シンポジウムではモンゴルの環境問題とその課題及びモンゴル政府の取り組みや日本企業，行政機関などの環境問題への積極的な取り組みに関する研究発表が行われ，活発な議論が展開された。

両大会には多くの方々が参加し，活発な議論を交えながら，大きな成果を収めた。私自身も学問的に多く刺激を受け，充実した三日間であった。

2010年11月26日受付
江戸川大学　経営社会学科准教授